
ある日の魔法使いたち

心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の魔法使いたち

【Nコード】

N2651B

【作者名】

心

【あらすじ】

今日も平和な、グリフィンドールの談話室。15歳になったハリーとその仲間達が、ゆっくりと休日を過ごしていました。短編とはいえ、ちよつと長いです。最後まで読んでいただければ、幸いです

今日は休日だ。

僕はゆっくりと目を覚まして、枕元のカーデガンを羽織った。

天蓋のカーテンを手探りで開けて、眼鏡をかける。

窓は真っ白に曇って、外が見えなかった。

三つのカーテンは適当に開け放たれて、カラになっていた。

無造作にパジャマが脱ぎ捨てられて、布団もぐしゃぐしゃのまま。

トーマス達は、もう出掛けたのだろう。

一つだけ、閉じたままのカーテン。

僕は時計を見た。

もう10時だ。少し寝すぎた。

ベットから抜けて、閉じられたままのベットに向かう。

「おい、ロン。いい加減に起きろよ」

僕がカーテンを開けると、ロンは「うー」と唸って、布団の中に顔を埋めた。

「おい、起きろって」

「いいよー…休みなんだから、まだ寝かせてよ」

「……………」

こうゆう風に言ってくる場合、ロンは絶対に起きないことを知っている。

いち早く諦め、僕は着替えを済ませた。

課題を片付けてしまおうと思い、
いくつかの羊皮紙の束と羽ペンを持って、談話室への階段を降りて行く。

今日はホグズミード行きを許された休日だ。
ほとんどが出掛けてしまい、広い談話室は、ひと気が無くて閑散と
していた。

……と思っていた。

一番窓際の暖炉の前に腰掛け、
分厚い本を読んでる学生が、一人だけ居た。
丸テーブルに置かれたマグカップから、ぽわぽわと白い湯気が立ち
上っていた。

「ハーマイオニー！」

僕の声に、ピクツと反応して、彼女は振り向いた。
僕は駆け寄って、テーブルに荷物を置いた。

「おはよう、ハリー」

「おはよう。……あれ、君は今日、出掛けるんじゃないのか？」

「まあ、予定ではそうなるハズだったんだけど。状況が変わったの
よ」

「???」

「一緒に行くはずだったルームメイトが、いきなりレイブンクローのボーイフレンドと

デートする事になったの。私はお邪魔でしょう? だからやめたのよ」

「ああ…」

ハーマイオニーは膝に置いて読んでいた分厚い本をボタンと閉じて、隣の空いてるソファに置いて、大きく伸びをした。

僕は彼女の向かいに座って、羊皮紙のロールを手で伸ばした。

「あなた、朝食とってないでしょ?」

「ん? ああ、いいよ。寝坊したし。もう片付けられちゃっただろうし」

「ちゃんとトーストとベーコンと確保してあるわよ。お茶と一緒に持ってくるわ。」

「ちょっと待ってて」

そう言って立ち上がり、ひざ掛けを軽くたたんでソファに放り、キッチンへと去っていった。

談話室では、独りぼっちになった。

暖炉がパチパチなる音と、

キッチンで彼女が食器をカチャカチャやる音が、妙に響く。

「……………」

なんか、静かすぎると、逆に集中できない……。

「……………」

僕も立ち上がって、キッチンへ向かう事にした。

キッチンの戸を開けると、ナイスタイミングだった。
ハイマイオニーが高いところの何かを取ろうと、
木の台に登って、背伸びをしているところだった。

「おいおい、危ないよ！僕が取るから！！」

「え……あ、きゃああー！！」

——どさーんっ——！！

「い、いたあ……………」

「いったたた……………」

ビククリした。

台から落ちたハーマイオニーの、見事に下敷きになった…。

「きゃあ！ハリー、ごめんね！！」

「僕は大丈夫。怪我しなかったろう？」

「うん、大丈夫……あ、あれ？？」

「???」

「……た、立てない……」

「えー！どっか痛い？！」

「うっん……こ、腰……抜かしちゃったのかも……」

「……………」

僕の膝の上にちょこんと乗ったままのハーマイオニーが、
恥ずかしそうに、少しだけ俯いた。

「……………」

「……………」

な……

な、何を喋ったら良いのかわからない…。

こうゆう事は今まで何回かあったけど、
なんだろ……何だか言葉が出ない……。
おかしいな……

「ごめんねハリー、お、重いよね」

「平気。なんか悪かったな、僕がいきなり声かけちゃったから……」

「……」

「……」

また沈黙……。

なんだこの空気……！！

それにしても……。

ハーマイオニーって、こんなに軽かったけ？？

こんなに小さかったけ？？

なんだかこのまま抱きかかえて、ソファまで戻してやれそうなくらい、軽い。

前にハーマイオニーを持ち上げる時は、ロンと二人でヒューヒュー言ってた様な気が……。

——ああ、そうか。

僕がハーマイオニーをこうやって助けるの、実は凄く久しぶりだからだ。

いつもは大概、この役目は僕じゃない。

ロンだ。

ロンは意地っ張りだけど、ずっと彼女を好きな訳だし。

いつもこの位置にいるのは、アイツだ。

だから違和感を感じるのか……。

……この状況をロンが見たら、どうなるんだろ……。

考えると恐ろしい……。

静かな時間が流れる。

ハーマイオニーは膝の上で固まったままで、

僕は彼女の気の済むまでじっとしてようと思った。

僕は後ろに両手について、少し引き気味に、何となく彼女を見ていた。

相変わらず、ふわふわツヤツヤの栗色の髪の毛。

これが僕の顔に妙に触れるから、

何だか気まずくてとてもじゃないが普通に座ってられず、この体勢なんだけど……。

髪の毛からはいい匂いがする。

女の子として、色々手入れとかしてんだろっなあ……なんて思う。
まあ、彼女も15歳な訳だし。僕もだけど。

そう考えると、女の子らしくなったよなあ……。

普通に接してたら、そんな事、絶対に気が付かなかったけど。

「……………」

……ロンは気が付いてるのかな……。

こうゆう彼女の一つ一つを、ちゃんと気が付いているんだろうか。
だから好きなのかな。

この後姿とか、身の軽さとか、小ささとか、匂いとか、性格とか。
肩も凄く細いし、頭もちっちゃい。手とか、やばい。

それに、普段は凄くしつかりしてるのに、

こうゆう時っていきなり潮らしくなるもん……彼女。

……可愛いよなあ……。

——！！

はっとして我に返った。

な、何を考えた？！今…。

ハーマイオニーを”可愛い”とか、思った様な気が……。

「！！！！！！！！」

僕は思いつき恐ろしくなって、首を振り捲くつた。

おいおいおいおい……。

冗談は大概にしろってヤツだよ。

思わず、物凄い深いため息をついてしまった。

するとハーマイオニーが、反射的に振り向いた。

「ご、ごめんハリー！重いよね？」

「あ、ああ違う違う違う！！そうゆう意味じゃなくて」

「???」

「いいよまだ！乗ってなよ！！」

「……………」

「……………あ……………」

何も言わないで、彼女は向き直って、再び黙り込んだ。

”乗ってなよ”って、何だ。
何言ってるんだ僕は。

本気で、死んだ方が良いと思った。

——もう、この状態が良くないんだ。
いつそ抱きかかえて向こうまで運ぶか。

…でも。

せつかくだから、もう少しこのままでいたいと思う自分もいる。

この気持ち、なんなんだろう……。

「ね、ハリー……」

小さく、口を開いたのは彼女だった。
僕は少し目を丸くしたが、なるべく落ち着きを装って答える。

「ん？」

「ロン……まだ起きてこないのかな……」

「んー、どうだろ。さっきは一応起こしたんだけど、起きなかったんだよね」

「……そう」

「どうして？」

「いや、別に……。なんでもないの」

彼女の反応。

期待してた答えが、返ってこなかった時の顔してる。

僕の中で、またもや感じた事の無いような感情が、ぼんやりと、脳内を掠めた。

「……気になるの？」

「え？」

「ロンのこと、気になるの？」

「まさか……！ 気になんてならないわよ、あんな人！」

「ふーん……」

体の芯が、変に騒ぐ。

自分と、もう一人、誰か別の自分が居るみたいに、頭の中がグラグラするような、ズーンってする様な……

変な感覚。
変だ。

自分なんだけど、自分じゃ…ないような……

「ロンが起きてきてほしかったんじゃないの？」

「ち、違うつたら！しつこいわよハリー！！」

「そう……」

「なに？」

「いや、別に」

両手を床から離して、

反っていた上体を起こす。

彼女の髪に、口や鼻が触れる。

髪の毛の匂いが、凄い勢いで自分の胸をぎゅうっと、締め付ける様な感覚が走る。

自分の心臓が、物凄い速さで鳴ってる。

どうしてこんな事してるのか、自分でもさっぱり分からない。
何がしたいのか。

どうしたいのかも、さっぱり分からない。

けど……。

止められない自分がいる。

「ハ、は……ハリー……?」

「……ん?」

「……ど、どうしたの……?」

「どうもしないよ」

「どうもしないって……変だよ……!」

……確かに変だ。

なんだ、この気持ち。

「……やだ?」

「???」

「……こうしてるの、やだ?」

「やだって……べ、別に……いやでは……」

「……ねえ……」

「……なに??」

「——ロンだったら良いの?」

「え??」

何聞いてんだ、僕は。

「ロンだったら、そんな事言わないのかって、言ってるの」
「……ハリー???……」

もう、何を考えてるのか自分でも分からない。

衝動的に、

彼女の両肩を思い切り掴んで、いきなりこちらを向かせた。

息を吞んで目を丸くしてるハーマイオニーの顔が、

自分の目の前に向いたとき、

心臓を、何か物凄い固い物で殴られた様な衝撃が貫き、息が止まる。

「……は、ハリー……」

「……………」

「本当に……どう……したの……？」

右手で彼女の上体を支えて、

小ささや、軽さを、いつそう実感する。

彼女は……女の子なんだと、実感する……。

困惑しきった眼で、じっと僕を見てくる。

その眼が余計に、僕をどうしようもなくさせるんだよ……

僕は顔を、近づけた

「…………あ…………」
「……………」

「ストップストロープ!!!!!!!!!!」
「はい!!!!!!!!!!そこまで!!!!!!!!!!」

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン
カン!!!!!!!!!!!!!!!!!!
カンカンカンカンカンカンカンカンカンカン!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!

物凄い脳天を突くような轟音で、
思いつきり、ハッツツとした。

深い深い深い眠りから、殴り起こされた様な感じ。

「……………?!?!」

「……………?!?!?!?!」

音の鳴るほうへ、僕とハーマイオニーは目をやった。

キッチンの入り口に立っていたのは、
なんと、

フレッドとジョージだった。

フライパンとお玉を持って、ニヤニヤしてこっちを見ている。

僕とハーマイオニーは顔を見合わせて、きょとんとしていた。
状況がさっぱり飲み込めず、困惑以外の、何ものでもない。

「さて、じゃあーハーマイオニー、立つか!」

「……………は?」

フレッドが近づいてきて、ハーマイオニーの両脇を抱え、
ひょいっと軽々しく立ち上がらせた。

「???え…!?!」

「ご苦労!ハーマイオニー!」

フレッドが、ぽかんとした表情の彼女の頭を、ぽんぽんと撫でる。
と、同時に、ジョージが僕の手を引いて、立ち上がらせる。

二人とも、ニヤニヤはにかんで、必死で笑いをこらえてる様子だった。

……こうなった時の二人は、
大体、何か大きな悪戯を仕掛けた時だ。

「……………言えよ、ジョージ」

「え??」

「状況を説明なさい!!フレッド!!!!」

ハーマイオニーは、今や噴火寸前だった。

それでも微動だにしないこの双子には、本当に感心する……。

「はいはい、仰せのままに!お嬢さんっ」

フレッドはポケットから、
銀色の粒を取り出した。

「なによ、それ」

「これはな、”桃果草の実”だ」

「——!?!?!??」

「お、ハーマイオニー!!いい反応だね♪」
ジョージがピュッと、口笛を鳴らした。

僕はさっぱり状況が読めない……桃果草の実って…何だ???

「それ、どうしたの!?!」

「ちょっとね！裏のルートから仕入れたのさ！」

「仕入れたって……それ、奇跡の実でしょう?!」

「さっすが勉強少女は違うね!……そこまで知ってるなら、効力もご存知で??」

「……………ええ……」

「じゃあ、話が早いじゃないか！」

「!——まさか……試したの?!!」

ハーマイオニーの反応に、いよいよ双子は腹を抱えて笑い始めた。

僕は余計に意味が分からない。

そんな僕の様子も、今やこの双子の笑いの餌食になってる様だった……。

「何……まさか、この実……ハリーに……?!!」

「ああ、効果があったかどうかは、君が一番良く知ってるだろうね!——」

フレッドがウィンクした。

ジョージがフレッドの手からその実を取り、

ハーマイオニーの目の前に差し出した。

パチンコ玉の様にピカピカ光るその実に、

逆さになったハーマイオニーが映る。

「大変だったんだぞー。この実験するのに。

まず、君を一人にするために、シンシアにはブランと一緒にホグズミードに行って貰った。

それから、今日ロンが起きないように、昨日のうちにココアに、

マンドレイクの根の粉末を入れておいた。

君がお茶を入れる時に、はちみつが届かなくてこの台を使う様に、わざと高い所に隠し、

台にはネジを一本抜いて細工をして」

フレッドも身を乗り出してきて、ジョージの後を続けた。

「君がバランスを崩して落ちたとき、その衝撃で立てなくなるように呪いをかけておいた。衝撃魔法だ。

君は腰を抜かしたと思い、すっかり立てなかったらどう？立てるわけないよ、呪いをかけた僕が助けないと、永遠に動けない呪いだ。ハリーが下敷きになってくれるなんて予想外だったけど、その結果、効力は思ったより早く、しかも強烈に発動したみたいだったし。

——まあ、大成功って事だな！！」

双子は顔を見合わせて、また大声を上げて笑い始めた。

僕は状況こそ未だに読めないものの、
となりに立つハーマイオニーから、物凄い殺気を感じて身を強張らせていた…。

恐れ多すぎて、首を横に向ける事も出来ない……。

「殺すわよ……二人とも！！！！！！」

「やっべー！フレッド逃げろ！！」
「そんな怒るなよ、君もいい勉強になったろう？」
「黙りなさい！！ペトリフィカス・トタルス、石になれ！！！」
「危ないってソレ！！シャレンなんないから！！」
「あなた達の行動も、十分にシャレにならないのよ！！！！！！」

灰色の閃光を無謀に飛ばしながら、
ハーマイオニーとジョージとフレッドは、どたばたとキッチンを飛び出し、談話室を出て行った。

再び、談話室は静かになった。
僕は結局自分でお湯を沸かし、すっかり遅くなった朝食の準備をした。

ハーマイオニーが用意しておいてくれた、
トースト、ベーコン、目玉焼き、チーズ。
それからポットとカップを盆に乗せ、談話室に戻って腰掛けた。

さっきの話から推測すると、
僕は何らかの魔法にかかってたって事らしい。

だとすると、
さっきまでのハーマイオニーへの変な気持ちは、全部魔法のせいだったって事か。

なんだかどつと疲れたが、物凄い安堵感が流れた。

良かった。

自分が変になった訳では無かったんだ……良かったあ…。

紅茶の入ったマグカップを口につけると、
寢室の階段を降りて、ロンが談話室に入ってきた。
何も知らない平和なヤツが、ようやくお目覚めだ。
真っ赤な赤毛が寝癖であっちこっちにはねて、みっともないが、笑える。

「おはよう、ハリー」

「おはよう、ロン」

ロンが僕の向かいに座った。

さっきまで、ハーマイオニーが座っていた所だ。
大あくびをして、まだ眠そうに眼を擦っている。

「のん気だなあ……君って」

「え？なんで？」

「別にー」

「……なんだよ」

「なんでもないよ。それより、一緒に朝食食べちゃおうぜ。ハーマイオニーが残しておいてくれたんだって」
「へー。気が利くじゃん、たまには……」
「そんな憎まれ口ばっか言ってるないで、あとでちゃんとお礼言えよな」

ロンは顔をしかめてトーストを眺めてた。

「なあ、ロン」

「んー？」

「君は、ハーマイオニーが好きなの？」

「は?!」

「はっ?て……違うの?」

「冗談やめろよ!! 無いに決まってるだろ!!」

「ふーん……ま、いいけど。君のカップとって来るわ」

まだ何か言いたそうなロンを無視して、
僕はキッチンに向かった。

なんでそんな事聞いたのか、自分でも分からない……。
今更なのに。

ロンのカップを掴んでキッチンを出ようとした時、

入り口にロンが立っていた。

「なんだよ」

「いや……」

「なに？カップ、これでいいだろう？」

「ああ……」

「……………」

「……………なんだよ」

「……………僕、好きだよ」

「え？」

「……………アイツの事、好きだよ！って……………言ってるの……………」

真剣なロンを見て、

思わず笑ってしまった。

「知ってるよ、そんな事」

「まあ……………そうなんだけどさ……………」

「早く食べよう。今度は昼ごはんになっちゃおうよ」

僕は談話室に戻って、

ハーマイオニーの用意してくれた朝食を食べた。

食べながら、さっきまでの出来事が、いつまでもぐるぐると脳内を巡っていた。

早く魔法がとけてほしいと、願うばかりだ……………。

深夜の、閲覧禁止の図書室。

やっぱり忍び込んでいるのは、この双子……。

「いやあ……さっきはマジでハーマイオニーにやられるかと思ったぜ」
「ほんとだよ。フレッドがおとりになってくれなかったら、二人し

て終わってたな」

双子はケラケラと笑った。

「それにしても、凄い効き目だったな!」

「うん、でもちよつと危なかったな……ほんとにキスしちゃうかと思っただ」

「ああ、確かにちよつと焦った。ハーマイオニーも抵抗しないんだもんなあ」

「ハーマイオニーはロンが好きだと思ってたけど」

「まあ、女心なんてわかんねーからな!」

「まあな!」

「フレッド、この棚だ!早く本戻しちまえよ」

「分かってるよ」

二人は、桃果草の実の事が書いてあるこの本を盗み、戻しに来たのだった。

「よつこらせつと……あ、ヤベ!」

——ドサッ——

「しーーーーっ!!何やってんだよフレッド!落とすなよ、響くんだから!」

「わりいわりい、ちよつと手が滑っちまった」

フレッドは本を拾った。

落とした時に、偶然開いた場所をなんとなく眺め、目を見開いた。

「ああーーーー!」

「しーーーーーーーーっ!!いい加減にしろよ!」

「ちょっとジョージ！杖近づけて！！」

「なに？」

「あーもういい！！ルーモス！光よ！」

フレッドは自分の杖に光を灯し、床に本を置いて読み始めた。

「おいおい、フレッド！何やってんだよ！」

「ジョージ……見てみるよ、コレ……」

「何？くだらない事だったら、殴るぞ！」

「じゃあくだらなくなかったら俺が殴る！早く！！」

フレッドに無理やり服を引っ張られて座らされた。

それから、嫌々ため息を突きながら本を見て、やっぱり目を見開いた。

「お、おいおいおい……コレ……」

「ジョージ、実持つてるだろ？出してみろよ」

「ああ……」

ジョージはポケットをまさぐって、慌てて実を取り出した。その実を杖の光の下にさらして、二人は顔を見合わせた。

「金色になってる……」

「ああ、確かに金色になってるな……」

「ハリーに飲ませたのって……」

「銀色だよな……」

本に目を移して、二人はただ黙っていた。

本には、

” 桃果ノ実ハ、十分ニ熟シテカラ食スベシ。熟スマデ、二十日ノ時ヲ要スルモノ。熟ス知ラセハ実ノゴトク。

桃ノ色ナラ、マダ十日。銀ノ色ナラ、アト五日。銀ニ映ル、ソノ姿。間モ無ク時ガ、近ヅク合図。金ニ成レバ、時ハ、熟セシ、想フ頃”

……と、書いてあつた。

「どうして最後まで読まなかったんだろう……」

「早く試そうって、ジョージが言ったんだぞ！あーあ、これじゃあ失敗って事じゃねーか！銀の実じゃ、意味ないって事だろう??」

「でも待てよフレッド！じゃあ……ハリーは……??」

「なにが？ハリーは結局、魔法にも呪いにもかかってねーって事だろ」

「” がかってない” なんだよな？魔法に……」

「そうだよ、失敗だもん。がかってないよ。………ん??」

「………気が付いた??」

「……………」

「……………」

双子は再び、その金色に輝く奇跡の実を、
二人でマジマジと眺めたのです。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2651b/>

ある日の魔法使いたち

2010年10月12日02時59分発行